

選評

田口文哉

「擬人化」の図像学、その物語表現の可能性について

御伽草子『弥兵衛鼠』（慶應義塾図書館蔵）を主たる対象として

本論文は、中世末・近世初頭の絵画表現に見られる「擬人化」の特色を手がかりに、物語の展開や構造を把握しようとするものである。主に取り上げるのは御伽草子『弥兵衛鼠』（慶應義塾図書館蔵）である。言語テキストを中心とした従来の御伽草子研究では一律に「擬人化」と呼ばれてきた手法に対して、田口氏はイメージ・テキスト（図像）の分析をもとに、「擬人化」の度合いには差があること、しかも同じひとつの物語のなかに違ったレベルの「擬人化」が混在していることを指摘する。さらにそうした異レベル間の往還あるいは形態変化の仕組みが、物語をダイナミックに動かして行く大きな要因となっていることを、具体的な作例によって論証して行く。「擬人化」レベルの差異に着目した点は慧眼であり、それらが作品のなかでいかに機能し物語の展開に寄与してゆくかを読み解く分析力も評価できる。

具体的には御伽草子異類物の「擬人化」を、「動物本来の形態」「変装形態」「変身形態」の三種に分類し、『弥兵衛鼠』では「動物本来の形態（姿は動物だがことばを話し会話を交わすという人間的な行為を行う点で広義の擬人化と考えられる）」から「変装形態（直立し装束を着けながらも動物の属性を強く保つように表される）」へのいわば上昇変化によって、民衆が大臣公卿になるという中世特有の下克上の願望が表され、逆に下降変化によって動物同士の無償の援助が語られていると分析する。こうした「擬人化」レベルの上昇・下降変化の視覚的表現を、物語絵画における独自のイメージの論理と指摘する点も貴重である。

田口論文はもとより特定の地域と時代で制作／受容された御伽草子を対象として、ひとつの読解の可能性を示したものではある。しかし、その問題提起と方法論は美術史にとって重要なテーマのひとつである「擬人化」に一石を投ずるものと思われる。その点も選考委員会において評価された。今後さらに方法論を練り上げるとともに、今まで美術史的な分析が手薄であった御伽草子等の物語絵画の表現可能性について、より多くの具体例にあたって解明していくことが期待される。以上、本論文に『美術史』論文賞を授与する所以である。